

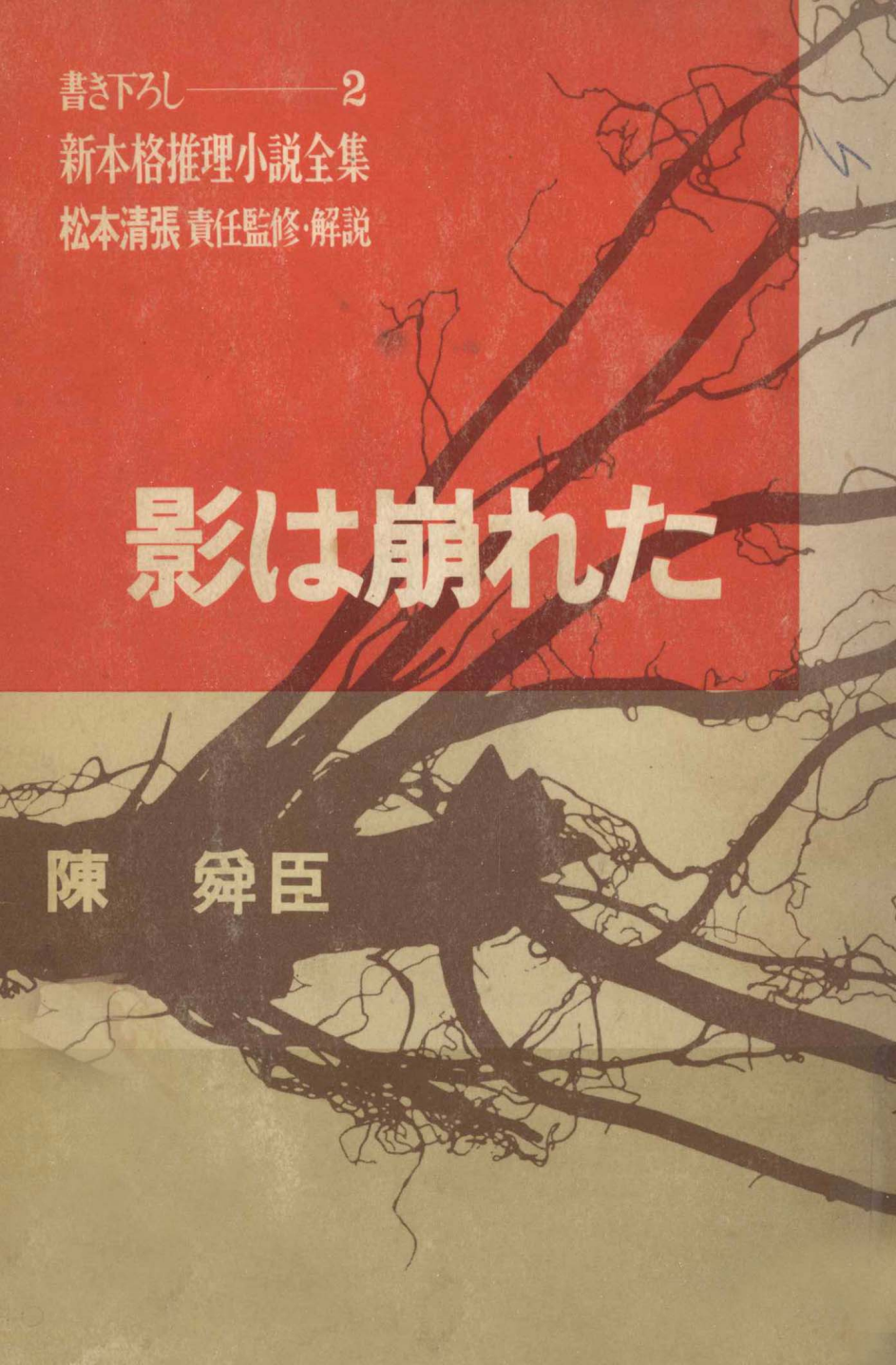
書き下ろし——2

新本格推理小説全集

松本清張 責任監修・解説

影は崩れた

陳 舜臣



書き下ろし●新本格推理小説全集2

影は崩れた

定価 三八〇円

昭和四十一年十二月二十日 第一刷

著者 陳舜臣

発行者 鈴木敏夫

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 藤田製本株式会社

発行所 読売新聞社

東京都中央区銀座西三の一
大阪市北区野崎町七七
北九州市小倉区中津口七三の二五

影は崩れた

■

陳

舜臣

■

読売新聞社

新本格推理小説に寄せて

松 本 清 張

推理小説は昭和三十四、五年から爆発的な流行をみせた。これは、その少し前から海外の推理小説の翻訳ものが読者に迎えられていたことも下地になっていたのだが、それまでの普通の小説が、とかく、単調、難渋、平板に陥っていたことにもいくらか関係があるのであろう。読者は面白い小説に飢えていたともいえる。以前から推理小説の読者は知識人だったが、今度は同時に、新しく婦人層をも加えた。

その期の推理小説を考えると、傾向的には社会派、風俗派に分けられ、社会派を細分すれば、組織を主体とした、たとえば政、財界の内幕的なものや、汚職事件などがとりあげられ、また個人生活と組織とのつながりも題材となった。これは、文壇で組織と人間とが論じられたところに大体一致する。

風俗派のそれは当然に市井の暗黒面や恋愛、愛欲の姿が材料になった。アメリカのハードボイルドを下敷にしたものは街の暗黒面を描くのに役立ったし、男女の愛を描写するに

も推理小説の手法が在来の平板な小説より新鮮味を与えた。

こうしてみると、推理小説はあらゆる小説の題材分野を吸収していたことになる。その分野によって個別化していたそれまでの普通の小説題材を推理小説は綜合^{そうごう}結集したともいえる。それから、その描写にしても、何となくはじまって何となく終るといような普通の小説と違って、とにかく設計された構成が存在していた。普通の小説だと、書きながら途中でいくらかでも構想が変えられるが、推理小説ではそうはゆかない。伏線を縦横に引き、その伏線を最後に全部生かして一つの焦点に方向集中しなければならぬからである。推理小説の読者は、伏線を絶えず気にしているのだ。

ジャーナリズムは読者の傾向に常に敏感である。当時の推理小説ブームの半分はジャーナリズムがつくったようなものである。雑誌「宝石」を編集していた江戸川乱歩が普通の小説作家に推理小説を依頼して回ったことなどもあって、途中からこの分野に参加する作家、新人群の出現など、推理小説は満開のお花畑の観を呈した。文壇小説さえ推理小説の手法を用いるのが流行した。

しかし、正直に言って、この時期に推理小説はその本来のあるべき性格を失いつつあった。その理由の一つは題材主義に倚^よりかかりすぎたためであり、一つはジャーナリズムが多作品を要求したため不適格な作品が推理小説の名において横行したことであり、もう一

つは、その結果、推理作家自体の衰弱を来したことである。これは反省すべきことであった。推理小説本来の興味は、アラン・ポウのジュパンもの以来、「謎」が伝統であった。

「知恵の闘い」(木々高太郎説)なのである。その意味では佳作がそうむやみと出るはずはなく、昭和三十四、五年から数年までのブームは空洞だったともいえる。あれは当時のジャーナリズムが半分ふくらました幻のブームで、現在の状態が普通である。いまさらジャーナリズムが「ブームの衰退」を云うのはおかしい。

今や推理小説は本来の性格にかえらなければならない。社会派、風俗派はその得た場所に独立すべきである。本格は本格に還れ、である。

しかし、ここまでできた推理小説の形式・内容が、戦前のそれにもどるべくもない。社会派・風俗派の通過は、ある意味において推理小説の視野をひろげ、対象を掘り下げ、程度を高めたことである。技術も前進させたと思っている。現時点で本格ものに還るといふことは、以上の基礎に立ったものであり、それからの新しい発展である。その意味で、わたしはさきに「ネオ・本格」という言葉を口走ったけれど、このシリーズでは「新本格推理小説」となっている。

およそ文学上の一つの発展には、作家によるグループ的な活動が必要である。それには有能な作家の参加が不可欠なことはいうまでもない。

幸いに読売新聞社がこの趣旨に副って新企画を打出した。いくら文学運動だといっても与えられる場がなければ手も足も出ない。わたしたちは欣然きんぜんとしてこの企画に参加することになった。執筆陣はこの書下しに異常な情熱を燃やしている。推理小説本来の姿は、雑誌に輪切りにして発表される連載ものではなく、書下しの封切版にある。本格ものはそうでなければならぬ。読者は、雑誌の上では一字もお目にかからなかった書下し小説を、心ゆくまで愉しまれるに違いない。

わたしは、執筆者諸氏より年齢的にいさか先輩である故に、監修という役目をつとめることになった。その選択はわたしの責任による。顔ぶれにおいて、間違った作家ばかりである。しかし、もちろん、ほかにすぐれた作家もあることだし、もし、第二の企画があればぜひ次の陣列に加ってもらうことにする。

各作家の傾向についての解説は各巻でわたしが担当するが、なにしろ、封切版だからわたしもゲラ刷をよむのがたのしみである。ただ、監修の責任上、各作品については前もって大体の構想について作家から聞いて意見も出している。ゲラを読んでも不審な点はダメを出して、読者への責を果すつもりである。

目次

新本格推理小説に寄せて 松本清張

第一章	帰郷	・	・	・	11
第二章	再会	・	・	・	27
第三章	探索	・	・	・	50
第四章	山荘	・	・	・	68
第五章	整理	・	・	・	88
第六章	大漁	・	・	・	105
第七章	問答	・	・	・	128

第八章	追跡	・	150
第九章	土産	・	167
第十章	難航	・	187
第十一章	夏菊	・	208
第十二章	密漁	・	226
第十三章	端緒	・	248
第十四章	深海	・	265
第十五章	浮上	・	283
第十六章	王座	・	302
解説			323
松本清張			

影は崩れた

第一章 帰郷

1

羽田空港のロビーには、同僚の井崎が迎えにきていた。

「やっと帰ってきたな」

と、井崎は手をさしのべた。

深尾尚作は相手の手を握って、ほほえんだ。

太平産業の駐在員として、深尾はバンコックに三年もいたのである。ときどき連絡のために短期間帰国したことはあるが、こんどは晴れて本社転勤なのだ。

「荷物をもってやろう。どうせぼくへのお土産もあるんだろう？」

井崎はそう言っ、深尾のトランクをもちあげた。が、眼は深尾の顔にそそいだままである。なにか相手が言いだすのを待っているようすだった。

「大へんなことがおこったね」

と、深尾は井崎の期待しているらしいことを口にした。

「そうさ。ショックだったなァ。その件については、あとでゆっくり話そう」

「手紙であらかた承知しているが、犯人はまだつかまらんのか？」

「どうも迷宮入りくさいんだ。……ところで、きみは会社へ直行するかい？　もしまっさきに会わねばならぬような人でもいたら、そっちへ車をまわしてもよいが」

「そんなのがいるわけではない」

二人は車にのって、丸の内にむかった。太平産業の本社は、いま丸の内Sビルの五階にある。深尾が三年まえバンコックに発った直後、本社が大阪から東京へ移ったのだ。連絡のために帰国したとき、深尾はなんとか新しい東京本社に寄っているが、まだなじめないオフィスだった。

車のなかで、深尾は井崎から事件のことをきかされた。

太平産業の前社長山根寛一が、三週間まえに、六甲山上の別荘で殺されたのである。

本社が東京へ移転したのを機会に、山根は社長をやめて、会長となっていた。彼自身も一応、家族ともども東京へ引っ越したのだが、やはり住み慣れた土地がよいのか、その後も関西に滞在していることのほうが多かったという。

なじみのある土地、というだけで山根が関西にいないのではない。深尾はそれを知っている。山根は関西に、いろいろと断ち切れないきずなをもっていたのだ。

投資している諸事業、不動産。——それ以上につよく山根を関西にしばりつけているものもあった。

安部悠子の面影が、深尾の脳裡をよぎった。

「二階のベランダで殺られたんだよ。麻縄を首にまかれて、吊りあげられた……」

と井崎は説明した。

深尾も前社長の別荘へは行ったことがある。ベランダのようも思い出せる。藤の柵にするつもりで、ベランダのうえにほそい鉄棒を何本も渡してあった。

「吊りあげられたというと、その麻縄をうえの鉄棒に渡したわけだな？」

と深尾はきいた。

「そうらしい。うえの鉄棒をテコに使ったんだ。もっとも犯人は、吊りあげておいて、おやじさんが完全にノビたのをたしかめたあと、また縄をおろした。だから、発見されたとき、おやじさんはベランダの床のうえに倒れていたんだ」

「麻縄は？」

「犯人がはずして、もっていつてしまった。だけど、麻縄をそんなふうに使ったことはわかっている。あの鉄棒にはグリーンのペンキが塗ってあったが、おやじさんの倒れていた場所の真上のごろに、縄状のもので擦ったあとがあった。麻の繊維も発見されたそうだよ」

「おやじさんは、ベランダでなにをしていたんだ？」

「籐椅子でねそべっていたんだろう。いつもそうやって、ベランダで夕すずみをする習慣だったらしい。だいぶながくいたんじゃないかな。そばのテーブルのうえの灰皿は、吸い殻で一ぱいだったそうさ。まんがの本も置いてあったときいたぜ」

「ふん、まんがを読んでいたのかい？」

「いや、犯行時刻は午後八時から九時までのあいだから、暗くて読めるはずはない。あかるときに読んでいたんだろう」

「そのときのおやじさんの服装は？」

「白っぽい浴衣だよ。……どうしてそんなことをきくんだい？」

「参考のためにきいただけだ」

深尾は、六甲の夜空に、白いものがあると吊りあげられる光景を、想像してみた。

生まれてはじめて建てた六甲山の別荘を、山根寛一はこよなく愛していた。毎年夏になると、一と月以上も腰をすえている。家族は別荘へはやってこない。なぜなら、そこは山根が、『関西の女』とたのしむ場所なのだから。

「あの女は、八時までいたそうさ」

井崎は深尾の顔を横目でみて、すこしためらいながら言った。

あの女——むろん安部悠子のことである。

井崎の話によると、山根の別荘の上手約半キロほどのところに、太平産業の取引先の寮があって、

その晩そこで社員の慰安会があったそうだ。大ぜいの社員がやってくると、人手が足りない。何日かまえにそれをきいた山根は、うちの人間を手伝いにやると申し出ていた。

うちの人間といっても、五十前後の別荘番の夫婦である。二人は夕方から手伝いに出かけて、別荘に戻ったのがちょうど九時だった。別荘番の妻のほうに、ベランダに干してあったバスタオルを取りに行つて、死体を発見したのである。

安部悠子は、いつもは別荘に泊っているのだが、その日、叔母^{おば}が神戸へ来るというので、午後八時ごろに山をおりた。庭の手入れをしていた庭師の老人が、そのころに仕事も一段落したので、彼女の運転する車に乗せてもらっている。

庭師は帰るとき、庭から二階のベランダに声をかけた。この調子なら、明日の午前中で仕事は片づく、と報告したのである。それにたいして山根は、ベランダの手すりのところまで出てきて、

「どうもご苦労。じゃ、明日も頼むよ」

と、ねぎらいのことばを返した。

生きている山根寛一が他人に見られたのは、それが最後であつた。安部悠子はそのとき運転席にいて見えなかったが、声はきこえたと言つてゐるようだ。

悠子と庭師が去つたあと、別荘番の夫婦が戻ってくるまでの約一時間のあいだ、別荘には被害者山根のほか、誰も^{だれ}いなかったことになる。

「きみはバンコックにいたんだから、これほどたしかなアリバイはない」